

「初期白磁」

特集 白磁の誕生と展開

平成31年1月2日(水)～4月21日(日)
東京国立博物館 東洋館5室

Early White Porcelain
Its Birth and Development

Room 5, Toyokan (Asian Gallery)
Tokyo National Museum
January 2 - April 21, 2019

中国で生まれた白磁は、世界中を魅了し、今日の私たちにとっても最も身近なやきものです。この白磁は、いったいいつどのように生まれ、展開したのでしょうか。

その誕生は、6世紀末の隋時代にさかのぼります。貴族文化の栄えた華北において、白い胎土もしくは化粧をして白くした素地に、灰を主成分とする透明釉をかけて高火度で焼きあげた「白磁」があらわれました。

北朝以来、中国には西方から高価な金銀やガラス、玉の器などがもたらされるようになり、貴族たちの生活を彩りました。白磁はこうした背景のなかで誕生したものと推測できます。

そして唐時代、8世紀半ばを境に、実用になかった製品が量産されるようになり、白磁の性格が大きく変わります。今回は、量産以前の様相を「初期白磁」と名づけ、白磁の始まりからその展開をたどります。

This thematic exhibition sheds light on Chinese white porcelain, namely when and how it was born and how it evolved. White porcelain, which was the foundation for blue-and-white porcelain and overglaze-enamel wares, is well known today. However, re-tracing how it was born and developed reveals very unique circumstances. For this exhibition, precious works of early white porcelain, which are shrouded in mystery, have been specially selected from the collections of the Tokiwayama Bunko Foundation and the Tokyo National Museum.



10 ◎白磁水注

Ewer
White porcelain
高28.5cm
初唐・7世紀
東京国立博物館

1 白磁獸耳瓶

Vase with Beast-shaped Handles
White porcelain
高58.9cm 初唐・7世紀 常盤山文庫

青磁から白磁へ — 「初期白磁」の誕生

青磁は、灰を主成分とした釉薬を掛けて高火度で焼きあげたものです。胎土や釉薬に含まれる鉄分が、還元焰焼成によって青色を帯びて見えるのです。その始まりは古く、3500余年も前の商（殷）時代前期までさかのぼります。この古代中国陶磁の核ともいえるべき青磁生産の流れのなかで、隋時代、華北において白く精製された胎土を持つ「青磁」とも「白磁」ともつかないやきものがあらわれました。



2 白磁天鶏壺
Chicken-headed Ewer
White porcelain
高24.8cm
隋時代・6～7世紀
常盤山文庫
少し青みがかかった釉が特徴です。



3 白磁天鶏壺
Chicken-headed Ewer
White porcelain
高23.5cm
隋時代・6～7世紀
常盤山文庫
No.2の天鶏壺に比べると、素地も釉薬もより白く見えます。

隋・7世紀の白磁杯

東京国立博物館所蔵、横河コレクションの白磁杯。薄く洗練された形が美しく、「唐白磁」の名品として知られてきました。しかし、あらためて紀年墓出土資料をたどると、No.8、9のように直線的に開く杯や碗の形は隋時代末のごく一時期に、陝西省西安付近や寧夏回族自治区固原の限られた地域にしか見られないことがわかってきました。

高度な造形技術がうかがえる白磁杯。いったいどのような背景でつくられたのでしょうか。



8 白磁杯
Cups, White porcelain
各高6.9cm
隋時代・7世紀
東京国立博物館



9 白磁碗
Bowl
White porcelain
高8.9cm
隋時代・7世紀
常盤山文庫
No.8よりも一回り大きいタイプですが、行き届いた精緻なつくりを見せています。

コラム

4 白釉杯
White Cup, Lead glaze
高8.1cm
北齊時代・6世紀
常盤山文庫
釉の表面がキラキラと金属的な輝きをもって光るのが鉛釉の特徴。



鉛釉 vs 高火度釉

「初期白磁」が登場する以前、貴族文化が栄えた北齊（550～577）では白いやきものがつくられていたことが出土資料から明らかになりました。この「白いやきもの」とは「鉛釉陶」、つまり白い胎土に透明の鉛釉を掛けて低火度で焼きあげたもので、高火度焼成の白磁とはまったく異なる系統のやきものです。

5 白磁杯
Cup, White porcelain
高6.3cm
隋～初唐・6～7世紀
常盤山文庫

ガラス質の高火度釉が流れて溜まり、淡い緑色を帯びて見えます。



ふしぎなカタチ — 祖形を探る

隋から初唐にかけて、華北にあらわれた「初期白磁」は、いったい何を指してつくられたのでしょうか。西方からもたらされたガラスの器、もしくは金属器でしょうか。何かを写したことは想像できるものの、そっくりな祖形が見つかっていません。これが「初期白磁」の特殊な性格の一つです。



11 白磁人頭飾り水注
Ewer with Decoration in Shape of Human Head
White porcelain

高23.6cm 初唐・7世紀 常盤山文庫
注口や把手は金属器を写したような、でも全体を見ると皮袋のような、ガラスの器のような、不思議な器形。類例が五島美術館やアメリカのシカゴ美術館などに知られています。



13 白磁鉢口瓶
Bottle with Bowl-shaped Mouth
White porcelain

高26.0cm 隋～初唐・6～7世紀 常盤山文庫
なんとも奇妙な形の口。水を入れて注いてみると、この「鉢口」から勢いよく流れてきます。



14 白磁盤口瓶
Bottle with Basin-shaped Mouth
White porcelain

高22.3cm 隋～初唐・6～7世紀 常盤山文庫
「鉢口」に対し、こちらはきっちりと削り出された盤口が印象的です。頸から胴に圈線が巡っており、金属器を意識してつくられたのかもしれない。



10 ◎白磁水注

鳳凰の頭の形をした蓋を外して見ました。独特の膨らみをもつ胴の形が際立って見えます。ガラスを模したのか、金属器を模したのか、どちらともとれる不思議な形です。

「初期白磁」最後の姿

始まりにおいて、西方からもたらされた何かを写していたことが「初期白磁」の特色でしたが、670年を境にその特徴が変化します。670年以後、「初期白磁」は、「何か」ではなく同時代に貴族の間で使われていた金属器を明確に写すようになっていきます。それが「初期白磁」の最後の姿となり、8世紀後半からは碗や水注など、実用主体の道を歩んでいきます。



35 白磁三足把杯
Three-legged Cup with Handle
White porcelain

高4.5cm 盛唐・8世紀 常盤山文庫
「鐘」とよばれる金属器を写しています。薄く、細部まで丁寧な作りです。



36 白・黒磁三足杯
Three-legged Cup
White porcelain with black glaze

高3.9cm 盛唐・8世紀 常盤山文庫
これも「鐘」の写しです。なぜか内と外を白と黒に塗り分けた白磁が730年代にあらわれ、「初期白磁」の最後を飾ります。



31 白磁把杯
Cup with Handle
White porcelain

高5.4cm 初唐～盛唐・7～8世紀 常盤山文庫
西方から影響を受けて中国でつくられるようになった金属製の把杯をまねたもの。把手が丁寧に面取りされています。



32 白磁把杯
Cup with Handle
White porcelain

高6.2cm 初唐～盛唐・7～8世紀 常盤山文庫
細部まで丁寧にあらわされています。同じ頃、唐三彩でも多くつくられました。

作品リスト

No.	名称	時代	所蔵／寄贈	所蔵番号
1	白磁獸耳瓶	初唐・7世紀	常盤山文庫	21073
2	白磁天鷄壺	隋時代・6～7世紀	常盤山文庫	21061
3	白磁天鷄壺	隋時代・6～7世紀	常盤山文庫	21090
4	白釉杯	北齊時代・6世紀	常盤山文庫	21080
5	白磁杯	隋～初唐・6～7世紀	常盤山文庫	21079
6	白磁杯	隋時代・7世紀	常盤山文庫	21046
7	白磁杯	隋時代・7世紀	常盤山文庫	21068
8	白磁杯	隋時代・7世紀	東京国立博物館(横河民輔氏寄贈)	TG-646
9	白磁碗	隋時代・7世紀	常盤山文庫	21094
10	◎白磁水注	初唐・7世紀	東京国立博物館(横河民輔氏寄贈)	TG-645
11	白磁人頭飾り水注	初唐・7世紀	常盤山文庫	21062
12	白磁長頸瓶	隋～初唐・6～7世紀	常盤山文庫	21092
13	白磁鉢口瓶	隋～初唐・6～7世紀	常盤山文庫	21089
14	白磁盤口瓶	隋～初唐・6～7世紀	常盤山文庫	21091
15	白磁高足灯	初唐・7世紀	常盤山文庫	21067
16	白磁高足盤	初唐・7世紀	常盤山文庫	21066
17	白磁四耳壺	隋～初唐・7世紀	常盤山文庫	21077
18	白磁浄瓶	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21063
19	白磁壺	初唐・7世紀	常盤山文庫	21082
20	白磁壺	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21075
21	白釉壺	盛唐～中唐・8～9世紀	常盤山文庫	21074
22	白磁円硯	隋～初唐・7世紀	東京国立博物館	TG-2336
23	白磁小円硯	隋～初唐・7世紀	常盤山文庫	21084
24	白磁小円硯	隋～初唐・7世紀	常盤山文庫	21085
25	白磁小円硯	隋～初唐・7世紀	常盤山文庫	21086
26	三彩小円硯	初唐～盛唐・7～8世紀	東京国立博物館(横河民輔氏寄贈)	TG-680-2
27	緑釉小円硯	隋～初唐・7世紀	常盤山文庫	21049
28	緑釉小円硯	隋～初唐・7世紀	東京国立博物館(横河民輔氏寄贈)	TG-1122
29	白磁杯	初唐～盛唐・7～8世紀	常盤山文庫	21078
30	白磁高足杯	初唐～盛唐・7～8世紀	常盤山文庫	21093
31	白磁把杯	初唐～盛唐・7～8世紀	常盤山文庫	21069
32	白磁把杯	初唐～盛唐・7～8世紀	常盤山文庫	21071
33	三彩把杯	初唐～盛唐・7～8世紀	常盤山文庫	21072
34	白磁双耳壺	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21076
35	白磁三足把杯	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21083
36	白・黒磁三足杯	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21087
37	白・黒磁鉢	盛唐・8世紀	常盤山文庫	21088

◎は重要文化財

常盤山文庫とは

実業家の菅原通済すがわらつうさい(1894～1981)は、昭和18年(1943)から禅僧の墨跡や水墨画の収集を始めました。集められた美術品の周りに研究者が集い、学びの場となったのが常盤山文庫でした。昭和29年、還暦を機に実業界から引退した通済は公益事業に力を入れ、自宅のあった鎌倉常盤山の名を冠した財団法人常盤山文庫を設立し、コレクションを財団に移しました。現在コレクションは墨跡、水墨画、天神画像、中国陶磁の四つの柱から成っています。

常盤山文庫中国陶磁研究会

常盤山文庫のコレクションのうち中国陶磁は最も新しく、この10数年で形成されました。平成18年(2006)に文庫内に中国陶磁研究会を発足させ、研究と収集を行ってきました。研究の成果は会報(研究会報告)で発表、これまでに7冊の会報を刊行しています。

初期白磁

『初期白磁』常盤山文庫中国陶磁研究会会報7 表紙